

## □シンポジウム Symposium

### オバマの経済政策をどう見るか

---

講演者：五十嵐武士（桜美林大学大学院教授・東京大学名誉教授）

福島清彦（立教大学教授）

芳賀沼千里（野村證券金融経済研究所ストラテジスト）

司会：林倬史（立教大学教授）

日時：2009年10月3日（土）14:00-17:00

会場：立教大学池袋キャンパス14号館D201教室

立教大学アメリカ研究所は2009年10月に3名の政治・経済・投資の専門家を招き、公開シンポジウム「オバマの経済政策をどう見るか」を開催した。このシンポジウムの講演内容について、以下で簡単に振り返る。

最初に「オバマがつくる福祉資本主義」というタイトルで講演を行った福島氏は、オバマ大統領は「エネルギー」「医療」「教育」の3分野に巨額の投資をして、人間の能力を高めることが経済を成長させるという考え方に立ち、新しいアメリカ経済を作りだそうとしていると解説した。さらに元来アメリカは福祉国家をつくる伝統があり、このオバマ政権の経済政策は40年間ほど中断していたその伝統を再興しようとするものであると指摘した。そして主要国の福祉支出の比較やアメリカの全要素生産性の上昇予測の図表を提示して、この政策の合理性を評価した。またオバマ大統領が力を傾注した医療改革にも触れ、アメリカで医療費が高い理由などについて紹介した。最後に福島氏は「展望をもった中道主義」（Visionary Centrism）と評されたオバマ大統領のプラグマティズムを挙げ、現実的な妥協で優れた手腕を発揮するだろうとの見解を示した。

続いて登壇した野村證券金融経済研究所の芳賀沼千里氏は、豊富なデータを駆使して「株式市場から見た米国経済」と題した講演を行った。芳賀沼氏は、金融市場は往々にして時代を先取りすることがあるとして、「100年に1度の津波」と表現されるこの1、2年の金融市場の混乱・変化が、アメリカ経済の今後にどのような示唆を与えているか、3つの転機という視点から検討を加えた。1つ目として、今までのようなレバレッジを利用した金融機関の収益拡大が臨界点に達したことを挙げた。2つ目として芳賀沼氏が指摘した転機は、世界経済のグローバル化であった。2000年を境に、それまで差が見られなかった先進国と新興国の経済成長率に差が出始め、2009年はともに厳しい景気後退に直面したものの、今後は両者の経済成長率の格差は残り続ける

だろうと分析した。そして3つ目として今回の金融危機を経て、年金の仕組みがかなり変化していく可能性に言及した。また最後にアメリカの政治循環と株式市場の循環がほぼ同じサイクルで動いているという説を紹介し、現在の経済状況の位置づけを読み解く一つの視点を提供した。

続いて東京大学名誉教授で桜美林大学大学院教授の五十嵐武士氏が「三つの危機とオバマ政権」と題して国際的な政治経済の視点から報告を行った。五十嵐氏ははじめにオバマ政権誕生の背景にはイラク戦争、アフガン戦争、そして経済危機という三つの危機があったと読み解いた。そしてこれらの危機がアメリカの安全保障面や経済面における主導権に国際的な不信を生じさせたことを指摘し、グローバル化した世界経済の中でアメリカの地位が転機を迎えているとの認識を示した。その文脈の中で捉えられるオバマ政権の経済政策については、多分野にわたり意欲的な政策革新を目指しているため、「Too Much, Too Fast」とも揶揄されていることを挙げ、その実効性が疑問視されているとして、「志半ばの背水の陣」と評した。

講演に引き続いて行われた質疑応答では、東アジア共同体構想へのアメリカの反応やオバマ政権のエネルギー政策の財源などについて質問が相次ぎ、200名近い来場者を交えて活発な意見交換が行われた。

五十嵐氏と福島氏から講演原稿に大幅に加筆・修正を加えていただいた文章を以下に掲載する。

(文責：奥村理央)